西洋易知録

六

368

東京教育大学図書
醍醐文庫藏書
門伊9 968 巻6

西洋易知録巻之四下

第四篇

「チュートニック」會社の士普魯士(プロシヤ)と攻め取る事

㊟紀元千三百零九年會社の士マリーンビュルグを都とする

チュートニック」といふ會社第三の十字戦中より起りしことを既(ベルギック)上に説くり

波羅的海の東南普魯士(プロシヤ)の地は濕地森林多うり久る頃其地はボルツシ人(「スクラホニック」人種の一)として頗る勇猛なる人種住ひくり其民は皮又麻を衣服とふし馬の肉を食ひ馬

の乳汁と飲ミ日月星を禮拜を貴人の死して其屍を燒くや其妻妾奴婢兵器乘馬ゑ至るまで屍と共ゑ之を燒々う其民の用る所の兵器を長短槍のみゑれども能く西教の諸國ゑ敵をいたぐ耶蘇の教門其民ゑ及ぶことあるゝ波蘭（ポーランド）の民之を打從へんと欲して數軍（サ）を起して之を攻ること殆んど四百年の久しきゑ及ひゝれども之を勝つこと能はざりしとぞ

第五の十字戰終ヒし頃波蘭（ポーランド）の一諸侯「チュートニック」會社の士を招きて「キュルム」城（波蘭（ポーランド）の一邊城）を借し與へ「ルッシ」人を討つことを賴とゝり「チュートニック」會社の士（キュルム）城ゑ屯して軍（サ）をゝじめ後

又トルコと戰ふ城を築て（時ゑ千二百三十一年）此ゑ移り益（ボルニ）ツシ人と合戰しゝるが遂ゑ之を平定しゝり此合戰を紀元千二百二十八年ゑ始ゝり千二百八十一年ゑ終る其間凡て五十三年の長戰ゑして普魯士の地平定を此軍の始まりし頃リホニヤの義士（刀劍義士「チュートニック」と名つく）「チュートニック」會社ゑ加を（プロシヤ）普魯士平定より三十年の後社長都をベニースよりマリーンビュルグゑ徙しゝり

會社の士普魯士を平定るやボルニツシ人の酋長幾個を擧て士とあせしが平民を盡く奴僕とあしぬ此ときゝ又諸所ゑ城を築まして寇ゑ備へ且つ戰爭中ゑ社中の人

數多討死しなんぞ人の缺を補ふが為ゝ日耳曼の士を招きなりきれば日耳曼の語。國中ゝ弘まり懶惰と厭ふ風俗日耳曼人の氣質為ゝ國民ゝ推し遷りなんぞ牧畜耕作の業日ゝ盛んゝあり交易を波羅的海の邊りウィスチュラ河の両岸ゝ繁昌し海中より獲る所の魚を恰も山と為し海濱ゝ採る所の琥珀を殆んど丘のごとし國中之をが為ゝ巨萬の富を為しゝなり會社の領せし地。北を波羅的海りそウィスチラ河の西よりヒンランド灣の南岸ゝ至り南ハトルンゝ至るまゝぞ其地を今の東普魯士の全地西普魯士の一部并ゝ魯西亞の三郡コールランド。リボニヤ。イストニヤを兼ねりタゴ。ゴットランドの二島も亦其會社ゝ属せしなぞ國中の大都城をマリーンビュルグ。コーニグスビュルグ。ダンチックの三地ふなりなり

社長を大ゝ奢侈を極めたり社長嘗てリチュアニヤを討んと欲しニーメン河の両岸ゝ士を集めて之を饗應しなるが美服し多る奴僕ゝ命じて金襴の天蓋を擎げて各人の後ゝ侍せしめ三十種の珍物を以て之を饗し饗終りて後各人をして金皿金杯を持して退らしめなりとぞ其奢侈を極るること此の如し蓋し此の如く奢侈を極めしを以て富る國も遂ゝ疲弊るゝ至り國政も亦凶暴ゝ流まて士民を虐げ日耳曼より徙り多る人

こと侮りられぞ國民遂ゐ波蘭人ゐ援と乞て一揆と起
しゝゝ頃そ紀元千四百十年ゐ波蘭の兵會社の士とタ
ン子ンベルグ（南普魯西）ゐ初めて合戦し大ゐ之と破き
り時ゐ社長ユルリックと初め會社の士數多討死し賤卒
の死する者そ三萬人ゐ及ぶし
其敗北より會社の勢全く衰へしゝぞ後五十餘年即ち
紀元千四百六十六年ゐ至りて會社の士遂ゐ盡く波蘭
ゐ降きり

第五篇　瑞士人自立する事

要　紀元千三百十五年モルガルテン
ゐ合戦し　千三百八十六年セン
パックゐ又合戦ゐり
ヘルヘチヤ（瑞士の古名）ゐそガルリック
種族の民多く其地そ羅馬國ゐ属しゝゝり諸夷の侵入し
ゝるときボルゴンヂー國ゐ合し後又此國と共ゐ査理
曼ゐ屬き査理曼殂落して後日耳曼帝の属地とふるへ
ルヘチヤの地そ其内諸州ゐ分裂し皆帝ゐ属そとゝへ
ども各自ら其政府ゐり諸州の中ゐも最も著しゝりし
そリュセルン湖南ゥ三州スウィッツ。ユリ。オンデルワルデ
ン是きふり
紀元千二百七十三年瑞士國ハプスビュルグ侯ロドルフ

撰まれく日耳曼帝とある是を墺土利國帝族の祖ふり
とそ初めロドルフを瑞士なるかて數多の城邑を領し
瑞士諸州の守護を為しるゝが帝位を登るを至りても
瑞士人を見棄ちぐ數此國を歸りて民の労苦を慰さめ
數多の免許を與へられぐ瑞士人を甚だく悦び心を傾
くて日耳曼帝を仕へ恰も小兒の父母を慕ふが如く
ありし
然るに紀元千二百九十八年ロドルフの子墺土利王
利を父ロドルフがボヘミヤと戦て取りし地ありアルベルト帝位を即きしや
父の時瑞士人を與へる免許等を禁してゲスレルベ
リンゼルとふ二人の官司を遣はして此國を管轄せ

しめるがこの官司の為せし政甚だぐ兇暴ありしを
ぐ國民之を怨まざるいふるを
爰を瑞士の民をワルトルホルスト。アルノルドボンメ
ルクタル。ウエルヲル子ル、ストーファセルの三人の名とふ三人の豪
傑ありり紀元三百七十年十一月某日の夜を於て三
人ルユセルン湖邊の或る原を同志の親友三十人を集め
我們を國を報じて若し成らざれぐ必ぐ死んと誓ひし
を三十人の者盡く同じ言葉を誓ひるれを然らぐ翌年
元日の夜を事を起きんと皆く其日を心を記しぐ散
しるる
其三十人の中をウイルレムテルとふ者ありり此人たア

ルトルフの近傍なるブルグレンといふ處の住民より
て能く弓を彎きしが新春の到るを待ちぐして官司ゲ
スレルを躾殺しそれを奇異なる譚なりとて我を
試みたるに説き示さん然し當今の史家其真偽を疑
ふ者多しとぞ

官司ゲスレル瑞士人の墺土利王即ち日耳曼帝に心服せる
や否を試みんが為めにアルトルフの市場に澳土利
王の冠を懸け其前を通行する者を必ず腰を屈めて
禮を為せと觸しが一日ウィルレムテル子を携へて
其下を通行せしに禮を為さずそしらを捕手直に之
を捕へてゲスレルの前に引きへりゲスレル。テル

に向て汝そ弓に巧者なりと聞き及ぶ今汝が兒の
頭上に林檎を置て之を躾落さば汝が罪を免さべし
とつひに人に命じて其兒を杭に縛しその頭上に林檎
を置らしめいざくとテルを促せりテルをよくく覩
定して彈を放ちるるが其矢過ちて林檎を貫きれ
ぞ觀る者一齊にどらと喊聲を擧げりテルを
矢を受るとき別に一條の矢を匿し持ちるをゲス
レル早くも之を見咎めて云汝乙矢を持たぐやそ
れ何の為めぞと罵りてテルを少しも臆せる氣
色なく靜かに答て云く我若し甲矢を躾損ぜしとき
は汝を射て我兒の仇を報せんと欲されぞなりと

ゲスレル大に怒てテルを縛せしめ之をクスナクトの獄舍に繫ぐんと欲し即ち船を湖に泛べ船中にテルを入れて湖を渡らんとせしが中流に到るとき大風暴雨劇しく起りゲスレルを船を今にも覆るべく見へしかりテルを湖中の事に慣れたる者なりゲスレルゲスレル其縛を解きて船を漕がしめ多くテル竊うに悅び船を岬なる處に漕ぎ寄せ岸に跳り上りて林中に逃入り直に其中よりゲスレルを覘ひ之を射殺しぬ

是に於てテルの名天下に轟きぬ後モルガルテンの合戰にもテルを武勇を顯はせり紀元千三百五十年或

河に溺れて死せり

千三百零八年の春瑞士人兵を起して澳士利人の守る諸城を拔きぬ國中祝火を灯して勝利を賀せり

アルベルト帝之を閔て直ちに軍勢を集めて瑞士に進發しぬ

ゲレッツ之を裁して瑞士人に與せんと量りしが瑞士人弑逆の賊を納ることを恥て之を否ましぞジョンを餘儀ふく伊太利に匿ぬといと果敢ふく身を果ぬ今の君子瑞士人の所置を稱賛ぬ

アルベルト帝怒りて七年の後其子墺士利王レオポルド。スウィッツ瑞士州名を征伐せんと欲し一萬五千騎を

率ひてゴリングを出立を此地よりスウィッツに至るをサッテル山とイグリ湖との際長三里の陜路を過ぎさるを得ざ此路をモルガルテンの路といふ紀元千三百十五年十一月十六日の肉晨朝霧こめて照る日の影いと赤きに澳土利の兵山際の路に進めり鋼鋏を以て身を固めたる騎士を前陣に備へ歩卒を盡くこれに随ふ瑞士人之を閃き神に祈りて擁護を乞ひ互ひに諫め励ましてその勢凡千四百人ばかり路の側に埋伏して今やおそしと敵の到るを待ち居たりこれに又嘗てスウィッツより追放せられたる勇士五十人ばかり今度本國の為めに功を立てて帰参せんと欲しこれも亦路傍の険阻に登りて

待ちつゝ居りしが敵兵の到るを見て直ちに大石大木を其上に落しかけたれば澳土利の兵を大に亂れ立しを機会を千四百人の勢得たりと槍又は棒を舞して山際より跳り出で霧に乗じて敵兵を斬立てたれば敵の騎士或は馬と共に湖中に轉び落ち或は周章て歩卒を蹂躙もり嗚呼嘆ずべし此日澳土利の敗北せるや鋼鋏の甲冑鋭き長槍を以て寡き不練の兵に敵し棒又短槍の鈍きに打負けたるふれば澳土利の人を必ず皆口惜しく思ひつゝんぴ王レオポルドもまた危うしが馬の疾きを以て辛じて死を免れ山又山を越てウィントルチュルに馳せしがこの地に到着せし時は日已に沒せし頃なり

き

瑞士諸州のうちスウイッツの人此合戦に功最も多し又此後の大戦争にも功ありし今瑞士國と名づくるを蓋し此國諸州に冠たりしゆへあり（瑞士國もとヘルヒチヤと名つく）

瑞士の三州此かを互ひに相助けんこと紀盟ひらるゞ紀元千三百三十五年にリュセルンその同盟に加わり千三百五十一年にジュリッチジュグ又之まに加わりグラリュス。ベルンも亦同盟に加わりしかゞて瑞士八州の同盟始めて成れり紀元千三百五十三年瑞士又墺土利國とリュセルンに會して此時瑞士を勝利せし以来全く自立の國にして内後郵ども墺土利の方に為て決して異

論をることあらんと條約遂に決しあり瑞士の國人を弥職業を勉励して聊も奢侈をふることふうしろを其國益繁昌しぬり

スワビヤ公レオポルド（此人も亦墺土利「パップスビュルグ」家の君なり）瑞士を攻め平ぐんとバーデンを出立してリュセルンへと兵を進めぬりきて其兵センパックに到りしと紀瑞士の兵千三百人程険阻に據りて之まを支へあり時に墺土利の兵を騎兵四千人歩兵千四百人あり（レオポルド公諸将を會して戦ふべきや否を議せしに諸将皆咎て敵ハ農民の寄り集りし烏合の勢なり我等之を一舉に打破るべきを論を待たずして明らかなりや決して後陣

の来るを待つまを及ばじと言ひ終れば然らば直に戦ふべしと命ぜらるる頃を紀元千三百八十六年七月九日澳土利の兵馬を山戦に便ふべくして皆馬を棄て齊く堂々として陣を布く甲冑を烈日に照されて煌々と光芒を放ち其有様勇ましく見ふんども愚なる瑞士の人を義と期しるることなれば之を見て恐るる氣色ふく各天を拜して勝利を祈り皆一齊に攻め懸る澳土利の兵も固より悍き精兵なれば其兵と戦ふこと僅の間に六十人を斬り倒しあり時に澳土利の兵両翼を進めて其兵を取圍んとせしが瑞士の勇士アルノルド、ホンウィンケルリード（オンデルワルデンの人）一人真先に跳り出で

當るを幸ひ勇を奮て斬り倒しるれば澳土利の兵爭ひ進てアルノルドを取り圍み遂に之を突き殺しあり瑞士の兵此間に乗じて驟雨の如く敵陣に突入し散々に斬立てるれば澳土利の兵を大に敗北し討死する者立地に二千人に及べり此時レオポルド公も亦潔よく討死しるり

是より二年の後澳土利の兵又瑞士人と子ヘルスに戦て澳土利の兵又敗北しるり

紀元千三百九十三年瑞士の諸州ジュリッチに會合して盟を尋ね左の箇條を約束しあり

瑞士の人を無益の戦爭を起さざるべし若し戦爭を

為さざることを得ざるときは國中一致して敢て私
の不の字をいふべからざる戰場に向ては傷くとも走
るべからざる大將の許さざるときは敵地といへども
亂妨をなべからざる寺院を壞つことあるべし婦女を殺さ
ことなかれ

是に於て瑞士（スイツル）を澳土利（オーストリヤ）の管轄を脱して長く自立國と
なり拿破侖（ナポレオン）の起るや此國も亦彼に屬絡せらるを
しとせざるも其滅るや又直に自立して一強國となる
是は「モルガルテン」センパックの両戰に勝利せしゆへ
なり

ハプスビュルグ。リュクセンビュルグ。バハリヤ三家
日耳曼帝即位の表

帝王の名	紀元
ロドルフ「ハプスビュルグ」侯	千二百七十三年
帝を立ざるの間	千二百九十一年
アドルヒュス「ナツサウ」侯	千二百九十二年
アルベルト 奥土利王	千二百九十八年
リュクセンビュルグの顕理第七	千三百零八年
帝を立ざるの間	千三百十三年
バハリヤの路易第四	千三百

澳土利のフレデリック第三（為政）	十四年	
路易獨逸を攻	千三百三十年	
リュクセンビュルグの査理第四	千三百四十七年	
ウエンセスラス王ボヘミヤ	千三百七十八年	
フレデリック王ボルンスウイッキ	千四百年	
ルエペルト里尼を攻	公	
ジヨシュス「モラビヤ」を攻	千四百十年	
シギスモント邦牙利王	公	

第六篇　任侠の風俗を述ぶ

中古泰西の人羅馬滅亡の前を太古と名つけ其滅亡コロンビュス亞墨利加を發明するに至るまでを中古と称す

「シハルリー」（任侠と云ふが如し）と云ふこと武藝を好み太平なる園囿なるを武勇を競ひ戦争なるときを戦場なるを功を争へり是を「シハルリー」の事といふ

「シハルリー」の原始を尋ぬるに一朝一夕に起りし事にあらず羅馬（ローマ）の諸撒（ヒルマン）盛んなりし頃日耳曼の國人既に其風あり故にタシチュス氏（羅馬の学士）云く此國にあるを貴族の子弟といへども皆名高き大将の旗下に事へて勇士と稱せらるることを面目とせりと羅馬滅ひ歐羅巴（ロウロンパ）大に亂れし中に勇を好む風を廢ることなく

漸く盛んなるあり査理曼の時その風頗る尚ぶべきこ
とありぬされど「シハルリー」の事十分なる諸國の風
俗とありしを十字戦の最中なりき
士とありて馬に乗ることを許されぬるそ二等
の賤官と經たるを得ぬ先づ侍童とあり次に扈從と
あり然して後に士とあることを得るとぞ今其委し
きを左に説かん
「士とあらんと欲する子そ七八歳の時に武勇の聞へ
ある或貴人の城中に遣りて奉公せしむ是を侍
童といふあり侍童は主公に事へ之を為めに手書
の使をなし主公の遊歩せらるるに又は遊猟ふごとに出馬

せらるるときも之に従て專ら丁寧信切に勤めざ
るを得ぬ其褒賞とーして侍童に武藝を学ばしめ音
樂象棋を教え傍ら經文をも教えり
偖侍童十三四歳の頃扈從とある此時父母之を誘
ひて寺院に詣で神を拜せしむ寺院の僧之を為め
に後来の幸福を祈り剣と帯とを授く是を禮あり査理
曼の祖しある後まで此禮ありしが此禮の行ハ
れしより「シハルリー」のことを更に盛んなるあり
とぞ中古に當て人性凶暴ありしが「シハルリー」の盛
んなるや人に心に義氣を生ぜしめしぞ風俗に
が為めに頗る改まりぬ故に「シハルリー」を中古一教

化の道と稱せども可あらん

侍童を女子に給事を扈従とするに至りては然らば男子に給事をなすもの扈従を各その任ぜる所の職務なり大家にては扈従多くは常に主公に侍する者なり或は食事のとき抹布をとりて新包を齎し又肉を割く者なり或は乘馬に秣飼ふ者なり或は倉庫の鑰を預る者なり食事終るとき扈従は坐敷に踏歌の支度をなし踏歌の絶間毎に諸人に菓子を配り酒を勸むることを任ぜまつる音樂をなして諸人を慰めけり

扈従の任右に述べたるが如きのみならず田獵を為し武藝を學て武道に達したる扈従は主公に隨ひ其兵馬を率て戰場に行き或は競武會に趣きたる戰の始まるとき主公は平服を着て別馬に乘り甲冑を兵馬の鞍上に懸け置らしむ戰の時刻至れば扈従其甲冑を取りて主公に着せしむ甲冑を着する術も習はざれば能はざることなりとぞ扈従は主公の戰ふ間暫時も扈従は其後を離まず主公の槍折られぬ之に別の槍を與へ主公の馬傷まれしときは別の馬を牽き來て之に與へ主公急なれば其助力をなす或は又主公傷ましとは安全なる地に誘て之を介抱せり是皇扈従の任なり　二十一歳に至るまで之を為

さゞるを以得ざゞ

扈従より士とあるときを数多の禮式あり其日を大拭「キリストマス」「エースストル」「ホワイトソンタイド」皆祭日名の日を用ひ士とある者其前日を断食して過去の罪を懺悔し一瞬も眠らゞ經を念じてその夜と明しけて沐浴して衣服を改むその日著る所の服を一領の袖服金緣絹服又を麻布の服一條の革帶よりして其上より甲冑を著せりさて其士を此服を著して寺院より詣で僧より劍を授け又一篇の經文を念ゞ此時士ハ孤寡僧侶を援け西教門の敵と戰ふことを誓ひ又經文を念ゞ其事終りしとき是迄ゞで主公あり

し人此人も亦士童扈従の二官を故に曾て侍士より経し者あり士より内ひて士多る者の為をべき事を云くあり必ゞ之を守るや否を問ひ士をして之を守らんことを誓はしめ其人の僧より渡せし劍を返し與へ一多び僧の手より觸るときその不浄を清むる意ありとゞ且つ士をして白革の帶を懸け金の制具を着て馬尾を在進むの車と着けしむ此とき主公劍を拔て其頸を刀背擊ちて是を扈従を士とあるの禮あり刀背擊を為さゞして耳を平手擊するの禮もあり

士の着しる甲冑ハ時く數變革せり昔し羅馬の騎兵ハ革より鐵の板を縫ひ着けるる鎧を著しるりしゝゞ俄的亞蘭其餘歐羅巴の諸夷も羅馬人より倣ひ今し

東京帝国大学 明治文庫蔵版

容ある鎧を作りてこれを着しゐしが十字戦の時より歐羅巴の人此の如き鎧を廃して亞剌伯人の用ふる鎖甲を着きり鎖甲を手足を動さる便よろれぞあり頭はい鎖頭巾を戴きその上は又鋼鐵の帽子を冠り手はを臂罩を懸け足はを鋼製の沓を穿りその有様奇くとして耶ろも趣きふし僅ろは楯の紋を聲花はして人目を悦ぶ足ろ尤も黄貂皮の縁付き多る外套を鎖甲の上は着せし者もこりゴットフレー等の耶路撒冷はあるて戦ひし項の戎服を此の如くはてぞりりる昔し馬は鎧を着せることはしが十字戦の時は

馬を射らるて之を為めは討死せし者少ゐ多ざるしらぞ其後を馬はも鎧を着せることはゐりぬ紀元第十四紀は至りて鎖甲又廃止皆鋼鐵の板を重ねて作りゐる鎧を用ひりり此鎧を鎖甲よりよく矢は當ゐべきと以てゐり

鎖甲の廃止て鋼甲の行いるるや士の装の美ゐりしこと驚くべし身はを金を撒き散しゐる鋼甲を着し頭はを羽毛を飾ゐる兜を戴りり其携ゐる所の兵器を槍剣斧鉞匕首ゐりしぞ

装の此の如く美は流せし後戦場はあるて功を立る士古より却て少し其故如何はゐるぞ人く敵の

矢を恐れて甲冑を厚くし多く人員を多く馬をも亦
鎧を著せるなれども実は敵の矢こそ防ぐべけれど
も自ら働くは便りよくざれど勇者も功を立てゞ
多くらしを必定あり故は此時は至りて「シハルリー」
のこと衰へたり
太平のとき士を競武會を催して樂しめり競武會を
佛郎西(フランス)はじめて始まりしことなりて速かは英吉
利(イギリス)日耳曼(ゼルマニー)なども推し遷り多く戯れあり戦の場所を周
囲は繩を張り又は枕を施し且つ見物人の為めは桟
敷を設けり戦ふ兵器は尖頭(とがしら)は木丸を著けたる槍
を用ひ相手を馬より突き落とを以て勝とする佛

王ヘンリー第二を競武會の傷(きず)より遂は殂落せしと
いふ最(いと)危き戯れあるべや故は中古の僧徒等之を
を誡めしとぞ
「シハルリー」の旨とする所三つあり其事をもと日耳曼(ゼルマニー)
人の勇を好める所より起りしなれど初めは純
乎たる武勇の事ありしが紀元第十一紀は至りて僧
徒等武士と交ることを好くを為めは社(なし)を作る
の禮式(ならはし)を立てしときより教法の意味「シハルリ
ー」の一旨となれり故は士となる者は必ず誓て云く
寺院を守護し教法の旨は背くべと後は女を敬ふ
こと「シハルリー」の一旨となれり此事や遥へ治

と導くの風を流さ易しといへども然せども婦人を賤視するを無告を虐するを近き虎蕃鄙野の所為を以て開化文明の人を之を可ありとせざるあり

「シハルリー」の衰るも亦一朝一夕のことにあらざる之を之を説らん紀元千三百二年佛國の士フランドル人とコーネトライ（西フランドルを在り）を戦ひ敗を取りしことあり是戦より人皆甲冑を着して用を立ざることを知り或人サクソン語を用て此合戦の事を述て云く吟之を直譯を文の洋格を拘ふを匹夫の勇を誇り且つ鐵工機匠（フランドル人をいふ）を輕んじて前後を顧ざる者ふく只管先を争て馬を進め多り豈知らんや我と敵との間を一條の深き溝らんとを馳来る貴人達そのつまづきを陷て馬を兎と共を剣を制貝と共を人馬を意隔者泥水中を沈そぬ其有様恰も人馬の雪崩ること疑れ憐を といふも愚なり此とき溺死し者幾千といふことを知らず其溝遂を人馬を以て塡まりぬ時を對岸を陣しまる商人の兵棒を舞して馳来り登らんと欲を 者多る騎士を恐を ぎりしクレシーポイクチールの両戦を英兵勝利せしを弓隊の力なり此戦争委しく西洋易知録外篇を引り

中古の末に至り歩兵又尚まさることあり始めぬ瑞士の歩兵を澳土利の騎士に勝ち其餘諸所の戰爭に瑞士の歩兵を功と顕せり是もまた「シハルリ」と哀へし物の一事なり

然し「シハルリー」と尤分に減せるものを火藥の發明ありそれ英國の強弓瑞士の大刀といへども之を當るべき甲冑を造らんと欲せど能いざることなりんや弾丸に至てを何物か能く之を防ぎ得ん砲銃の世に行はるゝや接戰少く距離遠き所にありて戰ふこと多し此時に當て勇ありても兵法を知らざれを勝を制し難し且つ兵法も火藥の發明せる以来大に

變革しを古の法を用ふるも益ふし抑火藥は亞刺伯人の歐羅巴に傳へし物なりと言ひ傳ふ既に紀元千二百四十九年出版の亞刺伯書に火藥を戰爭に用ひしことを述べあり歐羅巴にありてを之を發明を為ることを大に遅しゴスラルの僧スワルツ嘗て化學を學び試みに諸藥を調合せしとき思ふにも火藥を製し始めを火藥の原由を知りしを千二百四十九年より一百年も後をしことなりきて火藥の發明せる後始めて用ひる砲銃を小なる加農砲なりし紀元第十六紀に長き小銃を又手に懸りて之を放ちり小銃の行はるゝに至りても始めを騎兵を防ぐの為

めは槍を携ふる者も隊中に備へ置きしが銃槍を発明せしとき此事も已みぬ其後歩兵を諸國軍兵の最要ふる隊とあるり

佛士バヤルド紀元千五百二十四年辛巳の卒してのち佛士に「シハルリー」の士ふし日耳曼にあるてをマキシミリアン「第一帝を最後の侠士と名づく英國にてを「シハルリー」のことエリサベットのときまで滅びざりしなり」

今の貴人英語「セン トルメン」を中古の侠士「ヂントルメン」即ちと同じ故に今の貴人も古の侠士の如く神を信じ女を敬し敵を恐れ弱きを扶ける三德あるべきなり其德あけまぞ貴人の名位を保つといへども詐譎にして決して真の貴人にあらざる然れども善き事極まぞ必ず恐まる流るゝ世の習ひにて貴人の三德より數多の凶事生じ多り譬へば勇を好む德より徒らに名譽を争ひ各人相刺して快とし多る凶事起り相刺して快とすること今を ふ女を敬する德より淫亂遊蕩の惡風生じ多り今此風盛

嗚呼　豈嘆ぜざるべんや

和漢書籍販

西洋易知錄卷之四下終

西洋易知錄卷之四附記

第四世聞人の姓氏

アベラルド　紀元千零七十九年不列太尼（ブレターン）佛（フランス）の郡名なる生る○論理（ロジック）神學の師なりて其學を講ずるときそを之きを聽聞せる者五千人なる至りぬ○シントベルナルトこの人を識りて教法なる背きし人ありとりへり○其著そを所神學の書多し○千百四十二年シャロンスなる於て死そ

トーマス、アクイナス　千二百二十七年アクイナ（ナーフル）なる在りなる生る○貴族なり○神學なる長ぜ○著そを所「ションマ

和新館藏版

テオロジー（書名）なり○ドンス、スコチュスと異あるる説を懐きて大に彼と竟ひらり○千二百七十四年卒せ

シマブー　千二百四十年フロレンスに生る○貴族なり○當時画學の祖なり○千三百年に死せ

ジョン、ドンス、スコチュス　千二百六十五年頃に生る○

高名の神學者なり○千三百八年死せ

ダント　千二百六十五年フロレンスに生る○アルチリ家の一族にして政權を争ひし人なり○伊太利の詩の大家なり○其著せる所の詩「デヒナコメジヤ」（曲名）といふを未来の世の夢を説きし高名の詩なり○千三百二十一年ラベンナにありて死せ

ペトラルク　千三百零四年アレッゾに生る○伊太利詩の大家なり○アヴィノンに在り○深くラウラといへる女を愛しられぞ「ソンネッド」といへる詩篇を作りて其才美を稱しられり○其外に臘丁語の詩文を著せり○千三百七十四年に死せ

ボッカシオ　千三百十三年フロレンスに生る○其著せる「デカメロン」（書名）といふ小説なり一百條と作りし詩あり　シヤウセル　其詩に基きて義士詩談を作れり○然し此人を詩よりも特に文章に巧なりし○其著せる所「デカメロン」（書名）といふ小説なり一百條の物語を集めたるいと面白き書なり○千三百八十

四年ヨ死セ

ウイツキリッヘ　英國ヨルクサイルの人○オクソンヨ
ヨリ「パリオル」學校（學校の名ヨ）ヨリテ神學の教授セリ○英
國ヨリテ始メテ耶蘇教ヲ改革シタル人ナリ○英
文ヨ巧ミナリシ○英語ヲ以テ経典ヲ飜譯セリ○千
三百八十四年ヨ死セ

フロイサルト　千三百三十七年ハレンシアンヨ生
ル○英王の妃ヒリッパの書記官トナセリ○歴史ヨ明
ラヨシテ且ツ詩ヨ巧ミナリシ○其著セル書の中ヨ
千三百二十六年ヨリ千四百年ヨマデ西歐羅巴（ヨロッパ）の戰爭
武功ヲ述ベタル物語ナリ

シャウセル　千三百二十八年倫敦（ロンドン）ヨ生ル○英詩（イギリス）の大
家ナリ○イドワルド第三リチャルド第二ヨ仕ヘタリ
○著セル所義士詩談ナリ○千四百年死セ

第四世の紀事の表

紀事	紀元
第一の十字戦始まる	千零九十六年
歐羅巴の兵耶路撒冷を取る	千零九十九年
ノルマンヂのギスカルドナープルスの王となる	千百零二年
「テンプラル」會社起る	千百十八年
アマルヒに於て如智尼安帝の法律書を見出せり	千百三十七年
第二の十字戦始まる	千百四十七年
英國「プランタジレ子ット」朝興る	千百五十四年
英王ヘンリー第二愛爾蘭を攻む	千百七十二年
サラヂン耶路撒冷を拔く	千百八十七年
第三の十字戦始まる	千百八十九年
第四の十字戦始まる	千百九十五年
第五の十字戦始まる	千百九十八年
歐羅巴の人剛士但丁府に於て勇功をつくす	千二百零三年
ランゲドヅクの良民を征伐す	千二百零八年
少年の十字戦	千二百十二年
英王ジョン「マグナチャルタ」の法を許す	千二百十五年

第六の十字戦始まる	千二百二十七年
ゼンギス王亞剌伯國を勝つ	仝
グレゴリー第九背教の徒を探て之を責るの法を立つ	千二百三十三年
第七の十字戦始まる	千二百四十八年
亞剌伯國「アバシード」朝滅ぶ	千二百五十八年
希臘人再び剛士但丁府を復す	千二百六十一年
第八の十字戦始まる○此歳佛王路易第九殂す	千二百七十年
ハプスボルグのロドルフ日耳曼帝となる	千二百七十三年

「テウトニック」會社の士普魯士を取る	千二百八十一年
英王イドワルド第一華列斯を取る	千二百八十二年
土耳其人アクレを取る○此歳十字戦止む	千二百九十一年
コールトレー合戦	千三百零二年
教公都をアウィノンに徙す	千三百零五年
瑞士獨立の亂起る	千三百零七年
バンノックボルンの合戦	千三百十四年
モルガルテンの合戦	千三百十五年
クレシーの合戦	千三百四十六年
リヨンヂ羅馬の議長となる	千三百四十七年

日耳曼帝査理第四國法を作て黄金の法と名づく	千三百五十六年
瑞士八州合を	千三百五十二年
日耳曼「ハンセーチック」諸府の盟を府同盟せヨローンを會して尋ぬ	千三百六十四年
教公又羅馬を都を	千三百七十七年
センバックの合戦	千三百八十六年

西洋易知録巻之四附記終

矢野新蔵本

明治庚午年新鐫

河津孫四郎譯述

西洋見聞録

官准　知新館藏板

知新館藏梓